

ペンテコステとはギリシャ語で「50 番目」という意味で、「七周祭」の翌日です(7×7+1=50)。過越祭の最後の犠牲として、イエスが十字架にかけられた 50 日後のこの日、聖霊が新約の教会を誕生させるために降られました。この日を

「聖霊降臨日」と呼びますが、聖霊なる神様がこの日に初めて活動したと誤解してはいけません。天地創造の最初から聖霊は活発に活動しておられます。「地は混沌であって、闇が深遠の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」(創世記 1:2)。「動いていた」のヘブライ語は「ラハフ」で、これは「ぶるぶる震えている」状態を意味します。命令に即応しようとスタンバイしているとか、エンジンをアイドリングしている状態で、英語訳聖書では「ホバリングしていた」と訳しています。

神様は言葉ですべてのものを造られました。「光がある」「大空がある」と言われると光や大空が存在しました。「私の口から出る私の言葉もむなしくは、私のもとに戻らない。それは私の望むことを成し遂げ、私が与えた使命を必ず果たす」のです(イザヤ 55:11)。言葉は神様の知恵(理性)から出てくるものです。従って天地創造という大工事の設計者は「知恵」という「私」だったと美しく表現されています(箴言 8:30、口語訳)。父なる神と、神の霊(聖霊)と言葉。この「言葉」は後に受肉してイエスとなりました(ヨハネ 1:1)。また神の霊が震えていたとは、神の燃えるような愛を象徴的に表しています。ここに神の愛(聖霊)と理性(言葉)が、一人の神の中であってそれぞれ独立する人格として表現されています。人間の場合は、理性や愛は一人の人格の中に閉じ込められていて本人と区別されませんが、神の理性と愛はその巨大なエネルギーのゆえに、神様の人格から飛び出して、独立した位格を生んでしまうのです(三位一体)。

聖霊はサムソンの上に激しく降り(士師記 14:6)、ダビデやイザヤの口を通して語ります。ステファノはユダヤ人が歴史の中でいつも聖霊に逆らってきたと非難しています(使徒言行録 7:51)。いつの時代でも、神の御心を啓示してきた聖霊は、キリスト教会誕生という重要な場面で、可視的に人々の目、耳に分かるように降臨されたのです。「風は思いのままに吹く」(ヨハネ 3:8)。聖霊は必要な時に自由に働かれます。従って大音量の讚美歌や簡単なフレーズをくり返し叫んで、聴衆の心を人為的に高揚させ、異言(?)を無理やり生じさせるような礼拝が、聖霊の働きの結果であるとは、私たちは考えません。

ペンテコステはユダヤ人の三大祭の一つで(申命記 16:16)、離散のユダヤ人が大勢集まる日です。この人々の耳目を引き付けるために、大風の音、炎、外国の言葉が用いられました。風と炎は旧約聖書において聖霊の働き、神様の臨在を示す象徴です。外国語を知らないエルサレムのユダヤ人が外国語を話したということは、この日から世界中にキリスト教の福音が宣べ伝えられていくという象徴でした。これは、わくわくするような新教会スタートの号砲でした。